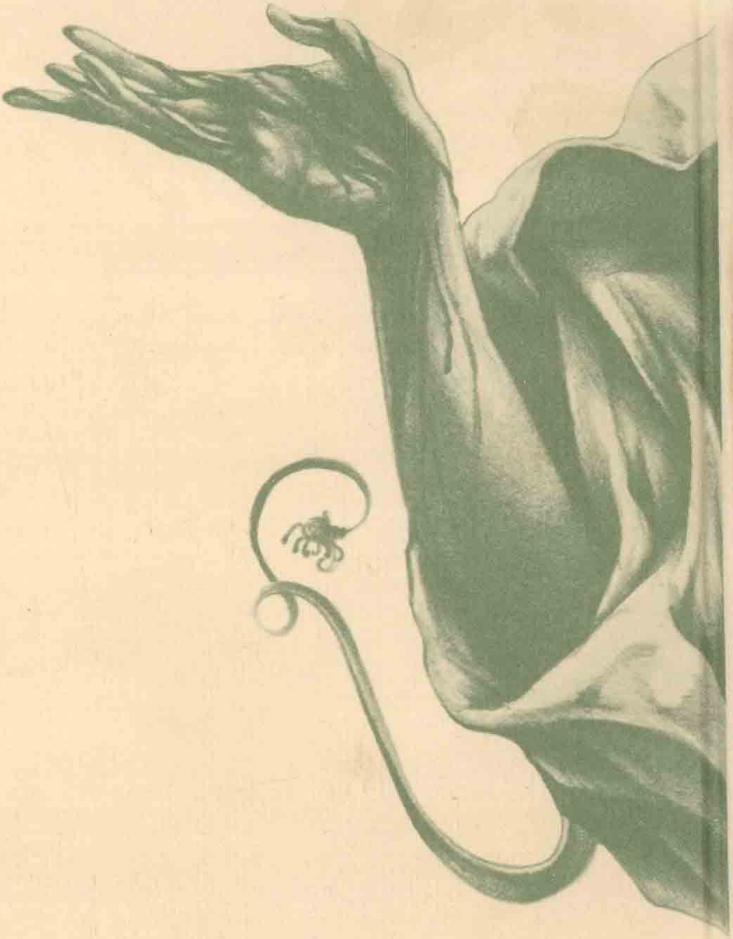
鬼恋童

赤江　瀑



鬼恋童

赤江瀑

講談社

著者略歴

昭和8年、下関生まれ。日本大学演劇科卒業後、NHKで脚本家として活躍。明治百年記念演劇脚本応募の歌舞伎台本「大内殿闇路」が最終審査に残り、その力量を評価され、小説執筆の決心をする。「ニジンスキーの手」にて第15回小説現代新人賞を受賞。以後、華麗な作品を発表。好きな辞「開聞は筆者の作。開眼は為手の態」(世阿弥)。

現住所・山口県豊浦郡菊川町田部

著書・「獣林寺妖変」「罪喰い」「オイディプスの刃」「美神たちの黄泉」「ポセイドン変幻」「金環食の影飾り」

鬼恋童　おにれんどう

第1刷　昭和51年2月22日発行

著　者　赤江　瀑（あかえ・ばく）

発行所　株式会社　講談社・発行者　野間省一

〒112　東京都文京区音羽2―12―21

電話　東京(03)945―1111(大代表)　振替東京3930

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　黒柳製本株式会社

©1976　BAKU AKAE　Printed in Japan

口絵写真撮影　本社写真部斎藤和欣

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります　（文2）

目次

鬼恋童――――――――――――――――5
阿修羅花伝――――――――――――――――53
闇絵黒髪――――――――――――――――107
炎帝よ叫べ――――――――――――――――149
寝室のアダム――――――――――――――――207

建石修志

装帧

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鬼恋童

慶長の年、朝鮮よりの帰化人李敬、すなわち初代坂高麗左衛門によって、毛利藩御用窯として開窯し、以来三百数十年、由緒ある伝統をつたえて現代に至る萩焼の長い歴史を点検するとき、そのどの一角、どの一ページの末端にも、《恋童》もしくは《鬼恋童》なる文字は、登場してこない。

誰も、見たことはないだろうし、聞いたこともない筈の文字である。

無論、だから、それが作者銘なのか、或いは茶器の景色を見立てての作品銘なのか、その見当もつけよう術はない。おそらく、萩焼に精通した専門家、陶芸家たちの間にも、この二文字もしくは三文字について、何かを知っている人はいまいと思われる。

いなくて不思議はないのだが、それはつまり言葉をかえていうならば、古文書や記録の類、或いは箱書き、云い伝えなどとして、今まで人の目や耳には触れなかったというだけのことで、この銘が、現実には決して存在しなかったという反証にはならないのである。

陶器に限らず、古美術、時代物の世界は、常にそのなかばは闇である。

《鬼恋童》は、その闇の世界に存在する。

萩焼、わけても、世に古萩と称されるいわゆる初期の珍重高価な時代物茶碗のなかに、正確に現存する。

時代の闇にとざされて、ただその銘が見えないだけのことである。いや、見えたとしても、全く別の顔を与えられていたりするのだ。

たとえば、
——古萩茶碗。右二代〇〇〇。
寛文時代の作に紛れ無之もの也。
とか、
——古萩。筆洗切茶碗。右三代〇〇〇〇。
元禄時代の作に相違無之者也。
などという、箱書きがつき、〇印の部分には、萩焼名家の陶匠工人の名が公然と書き込まれ、鑑定者の有名窯元とか、茶道宗家の墨筆署名、捺印などが堂々と付せられていたりする。
無銘の時代物には、こうした闇路はつきものだ。永久に、この闇路を脱け出て表の世界に浮かびあがることはない。
《恋童》もしくは《鬼恋童》も、いわばこの古萩の闇に棲みついていた、本来ならば決して陽の目を見る筈のない、暗黒の銘であった。

1

陶商・泥姫堂の主、通称『ドロヒメ』の高須野太平が、細骨の蛇の目傘の水を切って、
「先生、おってかな」
と、胴間声をはりあげながら、まさ土のたたきへ入って来たのは、その日まだ朝の内だった。
窯場の屋根を、紫いろの腰のよわい雨あしが走っていた。
「先生はいないけど、三下ならこっちだよ」
一将はロクロ場の奥の土間に広い板張りの踏台をひろげ、Gパンを臑までまくりあげて、素足で粘土を踏んでいた。

「まだゆうとりんさるんかいの。ええ加減で先生に落着きんさいや」
高須野はしゃかしゃかと仕事場を抜け、土踏み場へ入って来た。
「はあもう足掛け三年でえ、この窯も。ちったあ、あんた、窯元なら窯元らしゅう恰好つけにゃ。そこらのあんた、土練機使うて、型打ちロクロ廻しとる新興窯とはわけがちがうんじゃからの」
「新興は新興だよ。まだ駈け出しの、ピヨピヨには変りないさ」
「謙遜殊勝、大いに結構。そこがあんたのええとこじゃからの。しかしまあ、この口で蜥蜴食うかや時鳥、じゃの」
「おれが、蜥蜴食ってるっての？」
「なかなかどうして……」
高須野は目を細めながら、五十なかばの太い猪首をつっとのばし、
「ほう、よう練れとるじゃないね、先生」
と、一将の精悍な毛深い足で揉みこまれる濡れた粘土のひだの動きを、頼もしそうに覗き込んだ。
「土もみ三年、ロクロ五年とは、よういうとるな。あんたはまだピヨピヨかしらんが、この足はもう筋金が入っとるわい。正規の年季をきちっとつとめあげとるいうのは、恐いこっちゃのう……」
上半身裸の一将は、むきだしの胸の肉になめらかな汗を光らせて、一刻も小休みしない。
「駈け出し駈け出しいうとりんさるが、この泥で、ケロっとあの井戸写し焼いとるんじゃからの」
「あれは駄目だよ。鉋が切れなさすぎたから、カイラギがかえってうるさいよ」
「結構結構。望みはせいだい高う持って下さいよ」
高須野はその日、上機嫌だった。
カイラギというのは、高麗茶碗の王といわれて茶器の第一座を占める井戸茶碗独特の景色のことだ。茶碗の底の高台や、胴までのいわゆる高台脇といわれる部分に、釉薬が微妙にちぢれてかたまり

つき、美しい粒状となってあらわれる、茶人の最も珍重する窯変美である。ヘラや鉋と称する鉄片で、高台や高台脇を削り出す際に、生乾きの土がめくれ、その荒目に釉が溜りつくのだ。火のまわりが不完全で、本来ならば溶けるべき釉薬が溶けきれずに器の下部に凝結したものである。だから、切れ味のよい鉋ではこの窯変は出てこない。わざと鈍い刃物を使って荒削りに仕上げ、不完全に焼きあげるところに、この手法のコツがある。

朝鮮の陶工を元祖に持ち、井戸茶碗を写して始まった萩焼にも、このカイラギは、重要な美の手法となって伝承されている。

「ま、とにかくまずは用件だけ、先に片付けさせてつかあさい」

と、高須野は、黒の縮帷子の懐から厚手の和紙封筒をとり出して、傍の素焼の盛鉢の上に置いた。

「四十と五万。といいたいとこじゃが、二本ばかし欠けとりますで」

「何なの？　それ」

一将は、木棒で切った粘土の塊を重ね積みにしながら聞き返した。

「へえじゃから、こないだの井戸写しと、三島手の平茶碗。しめて、四十三万円じゃが」

意気揚揚とした声であった。

「おいおい、冗談じゃないよ。あれ、売っちゃったの？」

「いけんじゃったかね？」

「当り前ですよ。売りもんじゃないっていっただろ。あれはおれの……」

「個人的トレーニングじゃ、いうてのじゃろ？」

「そうですよ。勉強作品だよ、勉強。商品なら他に焼いてるだろ。そっちの方を売ってくれよ」

「そっちも、じゃんじゃん売っとりますで。茶碗、グイ呑み、皿、小鉢、徳利、水指し、花瓶に香合……あんたのは、安うてしっかりしとる。売る方でも張りがあらぁの」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「安いのは当り前だよ。腕相応に売ってるんだから。それに何だい？　四十三万？　ベラ棒だな、ドロヒメさん。おれ、まだそんな値の茶碗、焼いてやしないよ」
「いや、まあ聞きんさい。やせても枯れてもこのドロヒメ、創業百年の暖簾をあげとる。器に見合わん値は、あんた、先様が買ういうてもこっちで断る。それ位の商売はしとるつもりでえ。あの茶碗はその値でええ、ちゅうて見立てたんは、儂だけじゃない。古和の窯元も認めんさったのでえ」
「古和が？」
一将は足をとめた。
「そうじゃがの」と、高須野は、身を乗り出すようにして云った。「古和の窯元がちょうど見えとりんさっての、客に口添えまでしてくれんさったのじゃ。この人は四、五年先が楽しみな人ですよ、っての。どうかいの！　もちっとあんた、自信を持ちんさい。このドロヒメが見込んだ目には、狂いはないわい。名前で買うより、茶碗のよさでお買いなさい。あの御大が、客にそういいんさったのでえ」
古和は、一将が、高校を出るとすぐ住込んで丸十年修業した、萩焼を代表する古い有力な窯元だった。
現在七十二歳になる古和郷睡は、十二代目の当主である。焼物に関しては、何を訊いても、口では決して教えてくれない人であった。自分で探せ、見て盗め――を、完全に行動で示した陶匠だった。十年間起居を共にして、結局、郷睡の口から焼物についての話を聴いた記憶は一度もなかった。郷睡には、子供がない。弟の子を養子にして、他に古い職人が三人ばかりいた。
古和に住込んでちょうど十年目の初冬、本窯の日であった。窯づめ作業にとりかかっていた一将のうしろで、不意に郷睡の声がした。
「この窯を、自分のものと思え」

「え？」
「自分の窯じゃったら、そんなところへは置かんじゃろ」
一将がその時積んでいたのは、郷睡の赦しを受けて窯入れする自分の茶碗だった。茶碗類は奥積みといって、直火をかぶらない窯の一番奥に積む。その奥積みにも、茶碗の狙いによっては、窯の癖などがあって、いい位置とそうでない場所があった。
「いえ、ここで結構です」
と、一将は多少あわてて、郷睡を見た。
「自分の窯にしてみたいとは、思わんのか」
「？」
郷睡は、何気ない声でそれを云った。
後で思えば、謎のような言葉であった。
「と、とんでもない……」
と、一将は咄嗟にうろたえながら答えたのだが、答えながら、その折自分が考えた事柄の方に彼は動転した。
何故だか一将はそう思ったのだ。十三代目を継ぐ気はないのか、と、郷睡が自分に云ったのだと。無論、そんなことがあり得る筈はなかった。しかし、郷睡の跡取りである甥の養子が、器用な焼物の腕はあったが、凡俗の才であることは事実だった。一将の目からみても、その位の低さは歴然としていた。枯淡、豪放、それでいて奥底に凄艶の気を含んで吐く郷睡の気品の高い作風を、とても襲える器ではなかった。萩焼名流の一角をになっている古和の窯の伝統を想えば、適当な後継者さえ見つかれば、郷睡は、ためらわずにこの血縁の養子を廃嫡するだろう……。
不言実行、窯のためならば、黙って人を斬る人であった。

一将は一瞬、そんなことを考えたのだ。そしてそれを考えた自分に、肌寒い吐気を覚えた。たとえ何年先、どのように腕を磨こうと、この古和の窯が自分に継げる筈はなかった。筈のない事柄を、一瞬にしろ頭にうかべた自分の思いあがりに、一将は動転したのである。

しかし一度打消しはしたものの、その日から、一将は平静ではいられなかった。

郷睡の養子は、人柄の穏やかな、至極小心な男だった。兄弟子に当る三人の職人たちも、みな人のいい、一将にはよくしてくれる人間たちだった。郷睡がどんなつもりであの言葉を吐いたのか、確かめるすべはなかったが、郷睡の気質を知っているだけに、自分がここにいることが、この先古和の家内に思わぬ波風を立てる原因となっては……と、そのことが心痛の種となった。自分の思いあがりにはちがいなかったが、自分がいるために諦めれば諦められていた問題が再び芽をふき、郷睡の心中をかき乱しているのではないかという惧れが、一将の頭を離れなかった。

ちょうど一ヵ月後、一将は窯元を出る決心をした。一人前の職人に仕立てあげるまで、窯元は長年つぎ込む一方の立場にあり、仕立てあげた途端にハイさようならでは、窯元の立つ瀬がない。腹に据えかねることだったにちがいない。

しかし郷睡は、理由を問い糺すようなこともせず、ただ一言、

「そうか……」

と、静かな声で云っただけだった。

「焼物はやめるなよ」

と、そしてやはり穏やかな声で、付け足した。

一将が、現在のこの松本川の上流、中津江の奥の山裾に、わずか二袋の上り窯だったが自分の窯を築き独立したのは、それから一年後、つまり一昨年の、彼が二十九歳の早春であった。

「よっしゃ」と、一将は泥足で、一区切りつけるように、粘りの出た硬めの土の肌をぴしっと打ち、

汗まみれの顔を腕で拭って、「代蔵さん」と、裏口の方へ声をかけた。
「仕上ったの」
と、すかさず高須野が、傍からホッとしたような声をあげた。
一将は踏台をおりながら、
「いただくよ、その金。ドロヒメさん」
と、云った。
「そうかのそうかの」高須野は満足そうに首肯いた。「いや、これであんたも、ほんまもんの一人前じゃ。いうたらこれは、古和の奥赦しが出たも同然の金じゃからの」
高須野は、「ま、一服しんさい。儂がたてるけえ」と、こまめな足取りで、茶簞笥のある表の仕事場へとって返した。
入れ替りに裏口から、煮しめたような和手拭でズボンの土を払いながら、小柄な瘠せた老人がのそっと小腰をかがめながら入って来た。肉のない喉骨が鶴のようにのび、しみだらけの皮膚は枯れきって鉛いろをした男だった。土置小屋で篩にかけていた原土の粉が、その顔中にまみれついていた。
「ああ代蔵さん。泥姫堂が来てるんでね、この粘土の後始末、ちょっと頼むよ」
「へえ」
「どうかね？」と、一将は、水道口に出て体を洗いながら、代蔵へ声をかけた。
代蔵は粘土を土甕の中へ移しかえながら、
「ようのびとりますの」
と、ぼそっとした声で、答え返したきりだった。歯のない口が、その時だけ、もぐりと無表情に横に動いた。

仕事部屋の表口に茶道具等を置いた接客用の炉座があり、その横の土壁に素朴な一枚板の棚をつくって、何段にも焼物が並べられていた。一将のいう商売用の萩焼である。焼いた商品は、市内の陶器店にも出すが、こうして窯場直売の形もとられている。

「ま、一服おやり」と、高須野は、濡れたゴムぞうりをつっかけたまま炉端の腰掛けに坐った一将へ、改まって茶を差し出した。

「じゃ、いただくか」

一将は、何気なくその茶碗をとりあげて、口へ運びかけたまま、しかしその手は凝然と宙にとまった。そして長い時間、一将はそのままの姿勢で息をつめていた。

「どうかいの」と、高須野は、そんな一将を楽しそうに見やりながら、煙草にライターで火をつけた。

「やっぱり、わかりんさったかいの」

「古萩だね？　坂かな？　二代、坂助八……」

「いやいや。箱書きはここにあるから、まあゆっくりと味合うてのみんさい。こいつがあんたに見せとうて、スタコラやってきたんじゃから」

「まさか、名物ものなんじゃないだろうね？」

一将の手は、心なしか震えていた。

「ええから、のみんさいの。儂もまさか、この茶碗で茶をたてようなんて、思いもせんことじゃったが……いや、先刻の、急にフッとその気になった。あんたに、これでのませてみとうなったんじゃ」

高須野は、一気に茶碗を傾むけてのみほす一将の、若々しい喉の反りを眺めていた。

「どうじゃの？」と、そして云った。

「『白虎』の茶の味加減は」

「白虎？」

いきなり鸚鵡返しに一将は、おそろしい声で聞き返した。眦に、するどい青ざめた昂奮が、かげろうのように揺れて見えた……。

『白虎』

この豪華な白釉に包みこまれた時代茶碗古萩が、後にもう一度、血糊の海のなかで人目にさらされることになった日も、この日のように一日中、朝から糸雨がふりしきっていた。

ちなみに、『白虎』に関する或る古文書のなかの記述を、ここに抜き書きするならば、

——茶碗　対　白虎とよぶべし

かまあけたる未明より　雨ふる

明暦三年　春

と、ある。

つまりこれは、『白虎』がこの世に生を稟けた日の、実作者の手になる覚書なのであるが。

2

泥姫堂、高須野太平が、その日一将に見せた箱書きは、真新しい桐の木肌に墨の香もまだ生々しく、次のような文字が認められていた。

『　古萩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com